

WITCHER Demon's Hunt

筋肉バカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「だから、門」は嫌いなんだ。」

鬼滅の刃にあの男がやって来た！

「リヴィアのゲラルト・・・ウィツチャーだ。」

目次

鬼殺隊	8
別世界	1

別世界

こことは違う、遙か遠い世界。その世界は怪物や魔女といった人間を超えた存在や力が人々を恐怖させていた。だからこそ……

誰かが言った。

「彼らがやって来る。コインで雇われる哀れな怪物殺しが……」

ある集落の人間が語る。

「もし怪物に困ったら、彼らを雇え。」……と。

ある貴族は言う。

「忌々しい気味の悪い存在だ。だが、彼らの存在は不可欠だ。我々が生きるためにも。」

そんな魔法や怪物で溢れる不思議な世界。今宵はそんな世界から少し……いいえ、より遠く離れてもらいましょう。危険に溢れ、人が死ぬ。それに変われはありません。その世界はえらく哀しい人間と怪物の物語があること。彼の新たな出会いと戦い、そして別れ。時に哀しく残酷な真実に向き合わなければならぬかもしれないかもしれません。ですが、彼は決して屈しません。彼は最強のモンスタースレイヤー。彼の新たな物語。

人里離れた山。鬱蒼と生い茂る木々……不気味なまでに静まり返ったそんな場所。そこには良きを切らした少年と、おおよそ人間とは思えない怪物が立っていた。

少年の来ている黒い衣服には「滅」の文字。それは、彼が鬼を倒し、人々の生活を陰ながら支えている「鬼殺隊」の人間である証だ。彼らは鬼を倒すことができる。しかし、簡単ではない。常に命がけだ。いつ失うかもわからない極限の命のやりとり、それを年半ばもいかないうち若い少年が行っているのだ。常に勝てるとは限らない。

そう・・・今宵の相手「鬼」は酷く強いようで・・・

少年の周囲には元「人間」つまり「隊士」であった物が散らばっていた。

呼吸が乱れ、恐怖する。手に持っている鬼を唯一倒せる刃「日輪刀」は小刻みに震えている。

そんな少年を見て、鬼は鼻で笑い飛び掛かる。いくら自分達を殺せる武器を持とうと、恐怖の感情を前には手も足も出ない。死が近づくと人は自然と力が入らなくなるものだ。最も彼が一般隊士ではなく、鬼殺隊の最高戦力に値する「柱」と呼ばれる剣士ならば結末も恐怖する側も変わっていたかもしれないが・・・

「ヒッー」

恐怖から足がすくみ、思わず悲鳴をあげる。自分が今どんな声を上げ、どんな表情をしているのか？それはわからない。きつと情けなく失禁しているかもしれない。きつと情けなく鼻水を垂らし、目じりには涙を浮かべているかも・・・ただ姉や妹の仇をとりたかった。

悲劇とは突然に起こる物だ。両親と買物に出かけた。病に伏せた妹と、看病すると残った姉を置いて。ただそれだけ。近くの街にちよつとした買物。病気にかかった妹のために、自分に変わって看病している姉に、自分にラムネを3つねだった。きつと喜ぶ・・・妹と姉そして自分、3人で笑いながらラムネを飲むんだ。そう意気揚々と帰路につく。そこからはよく覚えていない。ただ・・・血の匂いと肉の塊が落ちていた。誰もいなかった。両親はその日からおかしくなった。やつれていき、飯も食わず、ある日冷たくなっていった。

両親を奪い、姉妹を奪った怪物。そんな怪物に復讐する一心でこの世界に足を踏み入れた。過酷で、血生臭い最悪な世界。だが。元々最悪だった。それだけで充分修行もこなせた。厳しい修行を受け、選抜にも合格した。約一週間も鬼のいる山に籠るといのは正気の沙汰とは思えなかったが・・・その頃は正気をうしなっていたのだろう。いつの間にかこなしていた。鬼を殺す自分の武器も手に入った。あとは殺すだけ。そう・・・それだけのはずだ。だが現実には甘く無いようだ。今自分は自分の仇に殺される。

眼を閉じ、最期に身体を任せた。

(あつけないな。結局何も果たせていないじゃないか。)

自分のことを鼻で笑ってやりたくなかった。

奇跡というのは気まぐれだ。

突如その空間が歪み、オレンジ色に輝き出す。

「なんだ？」

鬼はその奇妙な現象に目を奪われる。少年はいつまで経っても痛みが無い事を不審に思い、鬼と同じ光景を目にした。

「なん・・・だ？」

すると、ドスンっ！と重いなにかが地面に音を立てて出て来た。

その男？は奇妙な恰好をしていた。白髪の大きな体格をした男で、身体は鎧のような物で覆われている。首から下げた何かの生物を模したペンダントと、背中に2本の大きな何か・・・刀？を差している。なによりも目がいったのは彼？の瞳だ。怪しく光る黄色い猫のような瞳・・・それだけで彼が人間ではない”何か”だと分かる。

「なんだお前？」

鬼が問いかけるが、男はそれを無視するように頭を押さえ、軽く息を吐きながら周囲を見渡し、こう呟いた。

「だから”門”は嫌いなんだ。」

ひどく落ち着いた様子で鬼を見る。

「・・・グールか？随分とデカイな・・・死体を食べ過ぎて育ったのか？」

男の口から”グール”と聞きなれない単語が突然飛び出し、鬼は困惑する。しかも彼は鬼を見ても怯えず、まるで友人に話すような自然な体制で語りかけていたから尚更だ。まるで鬼と出くわすのは”当たり前前”であるように。

「なんだ・・・ぐる？とは。」

「知らんのか。しかも喋れる奴とは驚きだ。」

男は腕を組み、少し馬鹿にしたような態度をとる。

「おいガキ。」

彼がこちらに目を合わせて来る。

「ハ、ハイ！」

思わず上ずった声で返事をしてしまった。彼の纏っている気迫？のような物が直感で自分に伝える。“コイツはやバイ”と。

「目の前の怪物は・・・知り合いか？」

男は慎重に相手を観ながら聞く。隙があるようでない。彼は間違はなく人間ではない、かといって鬼の仲間であるとも限らないと理解した。・・・賭けだ。彼が何者か知りたい。だからこの言葉を選んだ。

「そ、そいつは敵だ！俺の家族を殺した怪物だ！」

そう叫んだ瞬間、鬼の手首が吹き飛んだ。男は片方の刀で鬼の手首を切り落としていた。

「話が見えて来たな。さあ来い、怪物。遊んでやるぞ。」

言うや男は素早く鬼の懐に飛び込み刀を振る。自分達とは違う、素早く切り裂く・・・というよりは体重と剣の重さに合わせて叩き切るといえるような少々荒々しい戦い方だ。そしてその刃が首筋に届きそうなところで、鬼は素早く後ろに下がった。

「・・・野郎！調子に乗んな！鬼血術！かまいたち！」

鋭い風の刃が男を襲う。だが彼は全く動じなかった。

パチンっ！風の刃が彼の身体をいつの間にか覆っていたオレンジ色の膜のようなものに弾かれる。

「なにっ？」

「ほう、面白い。」

男は何事もなかったかのように剣を構え直すと、鬼へと向かっていく。

その一方で鬼は焦っていた。

(傷の治りが・・・遅い。)

男によつて切り落とされた手首が生えてこない。そんなはずはな

い。鬼は再生能力に特化している。太陽の光か、日輪刀で首を切り落とされたりしない限りは再生可能だ。

「どうした？顔色が悪いぞ？」

男は煽るように笑い、剣を振り下ろす。

それを避けると同時に、鬼の顔にとてつもない熱が襲った。いや・・・熱ではない、炎だ。

「イグニ。」

男は口からそうこぼすと、右手から凄まじい炎を出し、鬼の顔面を焼いた。

「ギャアアアア！熱っちイイイ！何だア！なんなんだア！」

見たことも体感したこともない戦い方に驚く。だがそれは鬼だけではなく、それを間近で見っていた鬼殺隊士もであった。

(す・・・すげえ)

「終わりにしようか。」

男が言うや否やその剣は首元にあり・・・

「ここが弱いんだろ？」

核心を持った瞳で鬼の首をはねた。

「銀はお気に召したかな？」

鬼からの返答はなく、ただ静寂だけが男の勝利を意味していた。

少年はただ呆然と見ていることしかできなかつた。

男がこちらに視線を向け、ゆっくりと迫って来る。少年は恐怖した。なんだあの強さは？みたところ自身の身体能力を向上させるような「呼吸」を使っているようには見えなかつた。それになんだ、あの奇妙な術は、まるで鬼血術ではないか。聞いたことが無い、人間が手から炎を出せるなんて。それに彼の刀。彼の切った部位は再生していない、もしくは再生に異様なほど時間がかかっていた。それだけで恐ろしい。鬼を超える存在の可能性だつてある。そうなれば鬼殺隊も危うい可能性がある。彼が敵なのか味方なのか、それが分からなければ。自分を助けてくれたのは事実だが、気まぐれの可能性だつてある。恩をあだで返したくないのも事実だが、まるで何事も無かつた様に鬼血術を使う相手を簡単に倒した。それだけで警戒するには十

分だ。

「おい。」

「ひっ！」

少年の悲鳴を聞くと、ヤレヤレまたか？と言わんばかりに首を振り「なにも取って食おうとは思ってない。ただ、ここは何処で、お前が何者か？あとは・・・あのグール擬き以外にも怪物がいるのか教えてくれ。」

男がそう問いかけたので、少年は自分の名を言い、事情を語った。無論鬼のことも。話さなければ殺されるかも、という恐怖と、少なくとも助けてくれたお礼がしたいという複雑な感情からだった。

「つまり、ここはニホン？という世界で。お前達「キサツタイ」とかいうガキの集まりがああ怪物を倒していると。」
「ええ。」

「で、その「オニ」とかいいう怪物を倒すのはお前らの特別な剣か日光だけ・・・だが俺の「銀の剣」は効いたぞ？なぜだ？」

「さ・・・さあ。」

男は少し難しい顔をしながら、閃いた様子で

「奴からはほんの僅かだが、魔力の匂いがした。エルフの魔術師やイエネファーに比べればずっと弱いが・・・そうか！デイメリティウムか!?デイメリティウムは魔力の流れを抑止する。奴らの再生能力が体内に流れている魔力に頼っているものだとしたら納得がいくかし・・・」
「あ・・・あ・・・あの一！」

しばらくブツブツと呟いていたので心配になり声をかけた。

「・・・すまない。独り言が癖なんだ。考えるとついな・・・。」

男は少し申し訳なさそうに頭をかいた。

「そうだ、忘れるところだった。彼の名前を・・・」

「あなの。」

「どうした？」

「お名前を聞かせてもらっても良いですか？」

そう聞くと、男は少し考え、やがて口を開きこう名乗った。

「リヴィアのゲラルト……」

「ウィッチャーだ。」

さあ、読者の諸君！最強のモンスタースレイヤーであるウィッチャーとともにこの世界を満喫しよう！

e m o n ' s
H u n t

W I T C H E R
D

鬼殺隊

人気のないくらい森の中、1人の少年と50〜60代にみえる大男は立っていた。

「ムザン？そいつがオニという怪物を増やしているわけか。」

大男・・・ゲラルトは別世界の情報を整理していた。

曰く、この世界にはオニと呼ばれる怪物がいること。その元凶はキブツジ・ムザンと呼ばれるオニであること。そしてそれらを倒すキキサツタイと呼ばれる組織があること。オニは特殊な金属製のカタナか日光の光でなければ倒せない。しかもその特殊な武器で倒すには首をはねなければならぬこと・・・だが、ゲラルトの仮説が正しいければ“銀”もしくは“デイメリテウム”が有効的である可能性がある。あくまでも仮説だ。殺したのがたったの一体。これでは話にならない。

ゲラルトは考えていた。とにかく元いた“トウサン”に戻りたいのだ。だが、この世界で帰りの“門”を見つけなければ帰れない。オニを倒した時には既に門は消えていた。頭が痛い話だ。

愛しの“イエネファー”の実験に付き合ったのが運の尽きだ。帰り道も分からない以上、ここは彼女を頼るしかない。彼女が自分のいる世界を探し出してくれるか、自分が帰りの門をみつけられるか・・・或いは異変に気付いた自分の娘（正確には本当の娘ではないが）“シリ”が世界を飛び越え助けに来てくれるのを待つか。どちらにせよ、この世界で過ごす時間は長くなりそうだ・・・嫌な予感だがそんな気がする。なによりもこの世界はオニがいるせいか酷く不穏な所だ。長居はしたくないが、帰りの手立てがないのも事実・・・幸い念を入れて装備は整えてある。トウサンで仕上げた伝説級の狼流派の装備一式に、いくつかの銀と鋼の武器、石弓に霊薬、爆薬、オイルに錬金術の素材。連動に必要な高い度数の酒に、いくつかの希少な素材。あとは拠点だけだ。ま、最悪野宿でも良いが・・・

ウィツチャーはあまり眠る必要が無いのだ。

ここで1つアイディアが浮かぶ。少々危険だが・・・

「なあ少年。俺をその・・・」キサツタイ」とやらの組織に連れてつてもらえないか？」

すると少年は難しそうな顔をして

「それは・・・わかりません。俺の力じゃどうにも。お館様の許しがないと・・・本部も隠されてますし・・・」

すると上空でなにやら鴉が叫び出す。

『シキユウ！屋敷二げらるとヲツレテコイ！』

「なんじゃありゃ？」

ゲラルトは素早く石弓で鴉を狙うが

「や、やめて下さい！あれは違います！あの鴉は味方・・・というか連絡係みたいなやつで！怪物じゃありません！」

そう止められ、石弓を大人しくしまふ。それでも警戒心を解かずに、喋る奇妙な鴉をみていると、どこからともなく黒服の顔を隠した少年団がやってきた。それと共に・・・

「さつきから上で何をしてるんだ？猿かなにかの真似事か？」

上に気配を感じて目線を素早く移す。そこにいたのは蝶のような髪留めをした羽衣を着た少女だった。

「あら？随分早く気付かれてしまいましたね？」

妖艶に微笑む少女に、ゲラルトはより頭が痛くなった。長年の経験（特に女関係）から、ああゆう笑顔の女にロクな奴がいないのだ。分かる。彼がどれだけの女を抱いてきたことか・・・

「初めまして。私は鬼殺隊の「話なら下りてきてから聞こう。上に立たれていると、どうも落ち着かなくてな。それに、お友達も連れてきてくれたみたいだしな？」

ゲラルトが別方向の森の少し奥に目をやると、そこからもう1人の少女が刀に手を掛けて目の前に飛び出て来た。

「随分と小さなタイシさんだ。こんなガキに怪物退治をさせるとは、この世界は俺達が暮らしている場所よりも酷いらしい。」

鼻で笑いながら2人の女性を交互に見る。

「貴方が何者で、何処から来たのかは存じませんが、あまり私達を馬鹿にしないことですね。」

「・・・フム。」

少女達から滲む殺気を素早く感じ、ゲラルトは両手を挙げて降参のポーズをとった。ここで彼女達・・・いや、ここにいる全員を巻くのは不可能だ。あの殺気でわかる。少なくとも近くにいる少年よりも遥かに強い。手練れだ。常人を超えたウィッチャーの感覚でわかる。血の匂い、修羅場を潜って来た強い殺気。怒り、憎しみ。

ゲラルトが両手を挙げたのを見て、目の前の少女は手にかけていた刀から手を離れた。また、木の上から見張っていた少女も殺気を抑えた。

「それで、偉そうなお嬢ちゃん。君は一体誰だ？」

ゲラルトは前と上に目を配りながら聞く。

「しのぶ。蟲柱・胡蝶しのぶと言います。」

(・・・柱。これが?)

驚きだ。少年から話は聞いていたが、柱と呼ばれる存在がこんなにも幼いとは。しかも女だ。まあ、イエネファーやシリをみているため、大きく驚きはしなかったものの、その幼さには驚いた。てつきり、ヴェセミルのような自分と同年代に“みえる”大男を想像していたのだが・・・

「困惑してる・・・んでしようか？」

ウィッチャーは感情がほぼ無いに等しい。“草の試練”とよばれる特殊な“変異誘発剤”を体に注入し、人間離れた力や感覚を得るが、その代わり感情がほぼ抑制されてしまうのだ。最も、だからこそのどんなに強打で邪悪な怪物を前にしても、怯まずに戦い、敵を前にしても冷静に考え、打開策をうつことができるのもそのおかげであるため、感情の抑揚がほぼなくなるというのは一概にウィッチャーに対して悪い事ばかりではない。

「それでミス・シノブ。君は俺をどうするつもりだ？一応言っておくが、俺は半分人間をやめたような存在だ。だからと言って、オニとやらの味方をするつもりはない。俺はウィッチャーだ。金さえ払えばどんな怪物の首だつて取つて来よう。勿論、報酬次第だ。ただし、俺に何か妙なことをするつもりならその時は容赦しない。キサツタイ

だろうがオニだろうがまとめて相手をしてやる。お前達の上にそう伝えておけ。」

宣戦布告ととるべきか、警告ととるべきか。雇うべき・・・つまり仲間にするべきかしないべきか・・・

しのぶは悩んでいた。鬼血術を使う鬼を不可思議な力で倒した男が現れた。鴉から聞いたのはまるでおとぎ話のようだった。突如大男が窮地の隊士の前に現れ、手から炎を出し、最期は大きな刀で鬼を殺した。それも一瞬で。信じられなかった。鬼同士の争いの可能性がある、あるいは炭治郎の妹のように鬼にも人間を守るようなタイプが存在したのではないか？様々な疑念や考察をしながらカナヲと現場に向かった。敵対するようならば、大きな脅威になる前に倒す。そう覚悟を決めて。鬼とは違う第三勢力の恐れもあった。

到着し、みたのは白髪の大男だった。頑丈そうな甲冑を着こみ、銀色の狼の首飾りが美しい。背中に差してある2本の刀は自分達の使っている日輪刀とは造りがまるで違う。顔には無数の傷跡があり、どれだけの修羅場を潜って来たかがわかる。なにより、あの瞳だ。怪しい黄色い瞳。暗闇に光るネコのような瞳の形。それだけで彼が人間では無い“何か”だとわかる。

男はういつちやー？というらしい。名前はげらるとというそうさ。男に気付かれた瞬間は背筋が少し凍った。自分だけでなくカナヲの気配にまで気づくとはおもっていなかった。

危険だ。だが、もし鴉の話が本当で、彼が鬼と敵対しているなら強力な戦力となるに違いはない。だが、先程の発言や、彼の纏っている気配はあまりにも危険すぎる。賭けに出るか、ここで・・・倒す？

「どうした？用が無いなら帰った方が良いぞ？」

「・・・」

わずかに刀にかけた手に力を込める。それを察したかカナヲも再び刀に手をかけようとする。

「ガキをいたぶる趣味は無いんだが・・・？」

男の声に少し殺気がこもる。

しのぶはカナヲに刀を抜かないよう目で伝える。ここは・・・自分が!

「フッー」

上から刀を振り下ろす。

ガチンっ!と金属のぶつかり合う音がした。

お互いに武器をぶつけ、その反動に任せて距離をとる。

「ほお?それが答え・・・で良いのか?」

ゲラルトはヤレヤレと首を振る。

「いいえ。これは貴方を試す試練・・・というのはいかがですか?」

実際、彼女自身も気になる、この男：ゲラルトは強いのか?

「面白い。」

ゲラルトは鋼の武器を軽く一回転させると、防御の姿勢をとりながら様子を伺った。

そこからしのぶもよく覚えていない。覚えているのは飛び掛かっていつの間にか倒れていた。それだけだ。

カナヲは目を疑っていた。呼吸は使っていないとはいえ、仮にもしのぶは柱だ。そんな彼女が地面に背をつけていた。一瞬だった。目の前で摩訶不思議な現象が起きていた。夢?いや、現実だ。

「ハッー」

ゲラルトに再び上空から切りかかろうと飛びながら相手に近づくとするとゲラルトは手の平を大きく掲げ、地面に紫色の“何か”を発動した。マズイと感じ、よけようとしたが既に遅い。

(遅い!?)

突如自分の身体が遅くなっていくのを感じた。そして・・・

「キヤー!」

できるだけ素早く振り向き、ゲラルトが視界に入った時には、手を引っ張られ、力で倒されていた。

「合格か?」

“イヤードン”にの印力により、動きが遅くなったしのぶはあっさりと負けていた。全集中の呼吸を使ってもあの紫の輪の中は上手く力が入らなかつたから驚きだ。

一方ゲラルトも少し感心していた。本気ではないとわかっていたが

(イヤードンの中でもあれだけ早く振り向くとは。それに浮いた状態であの力強さ・・・並大抵の男ならば逆に倒されていたな。)

驚いたのはその振り向きと踏ん張り。自分を視界に入れたスピード、少し浮いているという不安定な状態からの踏ん張り。柱と呼ばれる存在は、伊達では無いらしい。とはいえ

(まだまだガキだな。)

自分相手に本気を出さず様子見とは、もし自分が鬼の仲間であったらどうするつもりだったのだろうか？いくら鬼を憎んでいるとはいえ、甘さが見え隠れしていた。最も、自分も手を抜いたのは事実だ。つまり“お相子”ともいえるだろう。倒すとき少々本気を出してしまったのは内緒だが。

「キサツタイ・・・雇うかどうか考えてくれ、シノブ。いい返事を期待してる。」

ゲラルトの瞳と強さを見て、彼女は腹を決めたようだ。

「お館様に頼んでみましょう、ウィッチャーさん。」

彼女がそう微笑むと、心なしかゲラルトの表情もわずかに緩んだ気がした。そして

「ウィッチャーは職業だ。リヴィアのゲラルト・・・ゲラルトと呼んでかまわない。」

手を差し出し、しのぶを立てさせて彼はそう言った。

「では、鬼殺隊の本部まで案内しますので、“隠”の者に従って行動して下さいね。」

どうやら、物語の歯車が回り始めたようだ。